

に在りて、國民精神の形成に於ては、必要なる教養を授け、かつ、一國の精神のより戦とが統合したるものとして、明確に神道を示教として認識して居る。ことに其の序文には、「神道は、神代書が説き及ぶ一、二九二の系、又、和魂萬葉傳、万葉集、古事記、國史略記、では、神社祭祀と宗教に非ざる、國家的理念こそ鎮座するもの」と定められたが、このように、本書では所謂大本以後の「國史略記」の神道と宗教の歴史の間の区別があり、その区別も更に、史實、教科書、雑誌を通じて考察されて居た。これは、其の別を、神代書、古事記、萬葉集、和魂萬葉傳、國史略記の「神代書」の「神代書」が明確に示されたこととされた。これは、本書によれば、二三の断片にもある。

また、本書の「神代書」と「古事記」の区別は、神代書は、神代書の断片を示す断片である。

これは、所謂の「教行信証」に於て「此書は、神代書、古事記、萬葉集、和魂萬葉傳、國史略記、の断片を示す断片である。」とされたこととされた。これは、本書によれば、二三の断片にもある。

石井公成（監修）、近藤俊太郎・名和達宣（編）
『近代の仏教思想と日本主義』

一 仏教、あるいはそれを基礎に置いた思想と「日本主義」との関わりを問うというのは、決して容易な課題ではない。そこにはさまざまな困難が伴う。その研究が必然的に戦争責任の問題に結びついていくということも、その難しさを作りだしている原因の一つであろう。もちろん、そのような観点から戦時中の仏教やそれをめぐる思想を問題にすることは、当然求められる課題であると言いうことができる。そしてこの課題は現在でも必ずしも十分に果たされているとは言いがたい。今後、その不十分性を克服することがいつそう求められる。ただ、視点をそこに置いたとき、この「責任」の問題に焦点が合わされて、それ以外の面に目を向けることが必ずし

「近代の仏教思想と日本主義」の断片を示す断片である。

おわりに

本書の断片を示す断片である。

藤 田 正 勝

も十分にはなされてこなかった。そういう点で、戦時期の日本の仏教に関する研究には多くの課題が残されている。まさにそこに切り込んだ研究として本書は大きな意義をもつ。本書の出発点には、「仏教思想と日本主義への入射角——序にかえて」のなかで言われているように、「仏教思想はなぜ日本主義に回収されたのか」という問いがある。ただ本書は仏教あるいは仏教思想そのものと日本主義との連続性を直接問うのではなく、むしろ個別の思想家に焦点をあわせている。そのねらいをこの「仏教思想と日本主義への入射角」は次のように表現している。「仏教思想それ自体に日本主義の淵源を探るのではなく、変容していく時代状況にそれぞれの思想家が即応し、仏教をいかに再編していったのかという過程の探求を目指そう思う」（vi頁）。

このアプローチには、「日本主義」という概念のあいまいさが関係している。「仏教思想」にせよ、「日本主義」にせよ、「絶えざる再解釈にさらされた流動・媒介的な概念」であり、それを明確に規定した上で考察を進めることには大きな困難が伴う。本書では「日本主義」に関して、たとえば昆野伸幸（『日本主義と皇国史観』、『日本思想史講座4 近代』所収）の「国粹」「日本精神」「国体ノ精華」などの語で表現される日本の過去の伝統に独自の価値を認め、現代におけるそのさらなる発揚あるいは保存・復活を目指しつつ、その伝統を根本原理として現実の諸問題に対処しようとする主義、主張」といった理解に見られるような「最大公約数的」な定義を前提とするだけで、その妥当性を検討し、明確な概念規定を行うという課題には踏み込んでいない——これもまた重要な課題であると言えるが——。むしろ個々の思想家が日本主義をどのように受け入れ、自らの思想との調和を図っていったのか、そのように日本主義を媒介とすることによって彼らほどのような思想表現や実践を行っていたのか、こうした問題を追究することに焦点を絞っている。

このような観点から本書では、仏教ないし仏教思想と日本主義との関わりを全体的な視点から問うのではなく、個々の思想家に注目して、それぞれの人物の苦悩や苦闘を描きだす

な特徴があると言えることができるであろう。抵抗と従属との間に、あるいはその外側に何が横たわっているのかを明らかにしたいという意図がそこにはあったと言ってもよい。その「間」ないし「外側」が何かについては、「仏教思想と日本主義への入射角」のなかでは、具体的に「安易な便乗から逡巡、妥協、葛藤、挫折、自責、さらには思想的偽装や流用」といった言葉で表現されている。

このような視点から当時の思想家たちの葛藤の姿を描きだそうとしたことは、あらゆる分野で二分法的な思考が闊歩している現状——AかBか、すべてをどちらかに整理すれば、それで事柄が理解されたかのように思い込む思考法が幅を利かせている状況——を考えたとき、すぐれた着眼点であると思うし、本書の各章においてたいへんいきいきとした考察がなされていることは高く評価することができる。

具体的には、本書の考察は、第一部「親鸞・聖徳太子」、第二部「日蓮・禅」、第三部「教養・修養・転向」の三つの部分に分けられている。第一部では曾我量深、梅原真隆、金子大榮、さらに井上右近や黒上正一郎ら「原理日本」のメンバーであった宗教者、『原理日本』の主要メンバーであった三井甲之らを取りあげられている。第二部では田中智学、石原莞爾、鈴木大拙、関精拙、紀平正美、市川白弦らが、第三

試みがなされている。しかも、既存の仏教教団に焦点をあわせるのではなく、むしろ「教団の現状に何ほどか批判的で改革志向を有する思想家や知識人、大衆に向き合う文学者や社会運動家」などを取りあげ、彼らが自らの思想形成の過程において、当時のさまざまな思潮とどのように向き合い、そのなかで「日本主義」をどのように受けとめていったのが問題にされている。

そのようなアプローチが選択された背景には、従来の研究方法に対する反省があったと考えられる。戦時期の日本仏教に関する研究は、教団があるいは個々の仏教者が戦争に協力したのかどうか、教団や仏教者はその責任とどう向き合ってきたのかという観点からなされてきた。そのような観点からの研究が必要であることは言うまでもない。しかし、そのような研究方法は、同時に、戦争やその遂行の主体となった天皇制国家に対して「抵抗したか、従属したか」という二分法を生みだしてきた。そのような二分法は、ある一面を明確に浮かび上がらせると同時に、他の面を背後に覆いかくしてしまふ役割を果たしたのではないかと、この反省から本書は出発しているように思われる。

そのような反省から出発し、考察の視点を「抵抗と従属の二分法」を超えたところに設定しようとした点に本書の大きな特徴がある。その論考も文献のいねいな読解に基づいてそれぞれの思想家と日本主義との関わりを徹し細に入り論じている。それらを読了して評者も多くの新しい知見を得ることができた。このように広範な領域において活躍した思想家や宗教者を取りあげ、彼らと日本主義との関わりを詳細に描きだしたことは、本書の大きな成果であると言えることができる。

先ほど「日本主義」という概念のあいまいさを指摘したが、本書では、以上の言わば本論にあたる三つの部分に先立って、石井公成の「日本主義と仏教」という論考が総論として置かれている。そこで石井は日本主義の前身から始めて、明治期における日本主義の成立、さらにその宗教と文学における展開の跡を丹念に追っている。「日本主義とは何か」という問題を考える上で重要な資料が提供されており、そういう点でも大きな意味をもつ論考である。そして同時に、それは本書を読み進めるための格好の導入にもなっている。読者にとつて裨益するところ大であろう。

本書は明確な意図をもち、さらに学会のパネル発表や研究会の開催などを通して十分な準備がなされた上でまとめられたものであった。ばらばらに成立した論考をただ集めただけのもので決してない。ただ本書を通読してみても、第一部から第三部のテーマの立て方においても、また、それぞれの領域におけるトピックの取り上げ方においても、やや必然性に欠けるという印象をもった。何を取り上げ、それぞれのテーマのもとに何を論じるのか、全体の構想を十分に練り上げ、それに基づいて、各章の記述に連関性をもたせる必要があるのではないか。この連関性が明確でないために、全体を通読したとき、それぞれの論考が孤立しているという印象をもつ。

たとえば曾我量深や梅原真隆、田中智学、鈴木大拙、三井甲之、彼らが受けとめた日本主義とは何であったのか、そこにはどういう共通点と相違点があったのか、彼らの思想を比較したとき、そこから何を引き出すことができるのか、そういった考察も必要だったのではないだろうか。

本書が目ざす目標をめぐって執筆者同士で予め議論し、全体として何をめざすのか、そのなかでそれぞれの章が担う役割とき、そこから何を汲み取ることができるかを検討する必要もあつたのではないだろうか。

「まとめと展望」で使われている表現で言えば、「評価よりも分析を重視し、内在的な読解につとめた」（五四〇頁）だけでは済まないのではないだろうか。つまり、多くの宗教家が容易に日本主義に傾斜していったことは、個人の資質や思想にその原因があるのか、それとも教団にそれがあるのか。あるいは仏教そのものにその由来を求めることができるのか、そのような点を明らかにすることは、「仏教思想はなぜ日本主義に回収されたのか」という問いを掲げる本書にとっても大きな意味をもつ問題であつたと思われる。それは単に当時の思想家個人に関わる問い、単なる歴史的な問いではなく、われわれ自身に関わる問いでもあるのではないだろうか。

仏教思想と日本主義の「接続」の根拠を明らかにすることも重要であるが、そこからわれわれは何を学ぶことができるのか、ということも決定的な意味をもった問いであろう。だからこそこの仏教思想と日本主義との関わりについての問いは、「われわれ自身の問い」であると思うのである。

割は何か、といった点を明確にしておくことも必要であつたかもしれないし、すべての論考が書き上げられたあとで、何を達成できたのか（できなかったのか）を執筆者相互のあいだで確認し、残された課題を明確にするような作業も必要だつたのではないだろうか。もしそういう総合的な議論をすることができれば、それを本書に収録するという可能性もあつたのではないだろうか。個々の論考の成果が大きいだけに、望外の嘆の類いかもしれないが、そのような希望を抱く。

もちろん先に述べたように、本書が目ざしたのは、仏教ないし仏教思想と日本主義との関わりを全体的な視点から問うのではなく、個々の思想家に注目して、それぞれの人物がその思想形成の過程において、「日本主義」をどのように受けとめ、それと格闘していったのか、その跡を追うということであつた。そこに本書の大きな特徴があり、意義がある。

しかし、事柄にはつねに二面的である。表の面には裏の面が伴う。いま指摘したこと、つまり個々の論考が孤立しているということも問われるが、このような考察と同時に、全体的な視点にたつて、これらの個別の考察を結びつけるということも必要だつたのではないかという印象をもつ。本書で取りあげた思想家や宗教家、さらには本書で取りあげられなかった人も含めた当時の人々の思想や信仰を全体として見たら、またどのような根拠に基づいてそれはなされるのか、もしその批判が、かつてなされたように、仏教の本来性に依拠してなされるのであれば、その本来性とは何なのか、あるいはわれわれはその根拠を別のところに求めなければならぬのか、もしそうであればその根拠とはいったい何なのか、以上のような問いは、やはり問われる必要があるのではないだろうか。それぞれの思想家の格闘の跡を示すだけでは、仏教思想が日本主義のなかに容易に取り込まれていった歴史からわれわれは何も学ぶことができないように思われる。以上のような問いは、今後われわれがどのような社会を築いていくべきかという問題とも深く結びついた重要な課題であると思われる。

このような問いは本書では前面に出していないが、しかし本書の編者たちがそれを意識していたことは、「仏教思想と日本主義への入射角」のなかで個々の仏教思想家の「思想と諸実践が、総体として宗教性を帯びた天皇制国家やその戦争に動員されていった要因についても再確認しなければならぬ」（vii頁）と言われたり、「まとめと展望」のなかで「戦時下の言論のイデオロギー状況の全体像を考えてみる」ことが次なる課題となる」（五四六頁）と言われていることから分かる。たしかにこのあと問われる課題であるとも言えるが、

本書の各章でなされた考察が孤立したままで終わつたのは、共通の問題意識になるはずであったこうした問いが背景に置かれたままであったことによるのではないだろうか。

この「まとめと展望」のなかでいくつかの「次なる課題」が掲げられているが、そのなかでも興味深いのは、「帝国日本とアジア、とりわけ植民地との関係も視野に入れた考察も必要となろう」（五四七頁）と言われている点である。この点は本書ではきわめて希薄であったと言わざるをえない。日本主義は日本主義として孤立していたわけではない。侵略を、そして戦争を準備するための、それを根拠づけるための日本主義であった。そしてそれは、海外の多くの人々に多くの苦痛を強いた。この問題に目を向けることなく、日本主義の問題について、そしてそれと仏教思想との関わりについて論じることはおそらくできないであろう。それが「次なる課題」として明確に掲げられていることは、一読者としてたいへんうれしいことである。続編が期待される所以である。

（法藏館、二〇二〇年九月刊、

A5判、五五六頁、六五〇〇円＋税）

（京都大学名誉教授 ふじた まさかつ）

〔新刊紹介〕

本郷真紹監修・山本崇編集

『考証 日本霊異記』上

本郷真紹監修・駒井匠編集

『考証 日本霊異記』中

『日本霊異記』は、正式名称を「日本国現報善悪霊異記」といい、平安時代初期に薬師寺僧景戒によって編まれた日本最古の仏教説話集である。上中下の三巻からなり、一一六縁（話）の因果応報に関わる説話を収載している。そこにみえる仏力の不思議を示す内容は後世の文学に多大な影響を与えるところにも、その内容は奈良時代以前からを取り扱う文献史料としても貴重な存在である。

従来、『日本霊異記』の研究は、仏教説話集という性格から多く国文学の分野においてなされてきた。しかし、近年、

宮崎健司

取載説話が当該期の社会や信仰のあり方をうかがいうるものとして、歴史学の分野でも多く取り扱われるようになってきた。『日本霊異記』のテキストや注釈書についてみれば、従来の研究動向と同様に国文学の観点からのものが主に提供されてきている。そこで、上述の『日本霊異記』をめぐる研究状況から、歴史学の観点からの注釈書の必要性が求められ、上梓されたのが本書である。本書が上梓されるまでの経緯については「後記」(上)に詳しく述べられているが、監修者の大学院の演習としてはじまり、研究会に発展して、およそ

十五年におよぶ研究の成果がまとめられたのが本書といえる。しかも机上のみではなく、故地踏査も数多く重ねられ、それらの成果もふんだんに盛り込まれている。

本書は全三冊で構想されているが、これは『日本靈異記』の調巻にあわせてのものである。そのうち、現在、上梓されているものは上と中の二冊で、次のような構成となっている。

〔上〕

巻頭図版

序・日本靈異記の魅力

目次

凡例

上巻（本文注釈 含む諸本訓釈）

解説

書誌

関連地図一覧

後記

執筆者紹介

〔中〕

巻頭図版

目次

凡例

校異が付けられている。

【書き下し文】は、底本に則して、諸本の訓釈を手がかりに漢字仮名交じり文で作成されている。【現代語訳】は、【原文】【書き下し文】【語釈】に基づき、わかりやすさに配慮しながら作成されている。

注釈部分について、まず【語釈】であるが、日本古代史・考古学・歴史地理学・仏教史の観点から必要と認められるものに、典拠を示すことに留意しながら施されている。さらに古訓についても必要に応じて付されている。なお、同じ説明が重複しないように既出の語については「上31(354頁)」などの注記があり、配慮がなされている。

次いで【関連説話】が示される。各縁に関わる説話について、『扶桑略記』『日本高僧伝要文抄』『東大寺要録』などの和書をはじめ、『冥報記』『法苑珠林』『金剛般若経集験記』など漢書・仏書からもそれぞれ抽出されている。これら丁寧な関連説話の掲出は、説話の変遷を考える上でたいへん参考になるものといえる。

また、【補説】は、記名執筆原稿として、各縁を理解する上で、日本古代史・考古学・歴史地理学・仏教史などの最新研究によって項目が設けられており、【参考史料】では、各縁の理解に必要な史料と補説の典拠となるものが丁寧にかか

中巻（本文注釈 含む諸本訓釈）

解説

書誌

関連地図一覧

後記

執筆者紹介

上は、序・目録・第一縁〜第三十五縁で構成され、対象説話の時代的範囲は五世紀後半の雄略天皇の時代から奈良時代はじめ聖武天皇の神龜四年(七二七)までに該当する。中は、序・目録・第一縁〜第四十二縁で構成され、対象説話の時代的範囲は聖武天皇の天平元年(七二九)から淳仁天皇の天平宝字三年(七五九)までに該当する。

上巻・中巻の各縁ごとにそれぞれ【原文】を示し【書き下し文】を付したあと【語釈】【現代語訳】がかかげられている。そして必要に応じて【関連説話】【補説】【参考史料】【参考文献】【関連地図】とその理解の参考なる項目が付されている。本文について、【原文】は、底本について、上巻は興福寺藏本(国宝)を、中巻は欠失する序を除いて真福寺藏本(国宝)を用いている。また対校本としては、基本的に国立国会図書館本(水戸彰考館本・金剛三昧院本(高野本)転写)・群書類従本によっており、それぞれ返り点を付すとともに、

げられている。そして、【参考文献】【関連地図】では、各縁の理解全体に関わるものに限定し、個別事象に関わるものは語釈・補説にまわされている。関連地図は国土地理院作成の二万五〇〇〇分の一地形図を基本に、内容に則しては新たに作成した地図が示され、それらの出典について【関連地図一覧】(上426頁・中522頁)が付されている。

このような構成からは、各縁を理解する上で十分な材料が提示された内容であることが理解され、編集において工夫や配慮がなされていることを感じさせる。それぞれの説話理解や分析の上で十分な材料が提示されているものといえよう。

最後には「解説」と、上には「書誌」が付されている。「解説」は、『日本靈異記』の構成と写本、著者景戒、上巻中巻各縁の魅力について概説している。各縁の魅力では、とくに歴史的観点に基づく魅力に力点が置かれ興味深い。その一方で、各縁を単に時系列の排列のみで捉えるのではなく、本書全体の構想の中で各縁の位置付けをも考慮すべきことも指摘され、古代史研究の史料としての取り扱いに留意すべきことも提言されている。また中の「解説」では、中巻の序の内容や中巻の四十二縁のうち第三十八縁までが聖武天皇ないしは聖武太上天皇の治世下の説話とし、孝謙天皇の治世下とする説話が見当たらないことなどをあげ、著者景戒の聖武天皇に

対する尊崇の念がきわめて強いことが読みとれることを指摘している。

上に付された「書誌」では、上巻の底本である興福寺本について詳述している。興福寺本の概要や発見の意義、紙背の「金蔵論」の最新研究との関係、奥書の釈読の問題などが述べられるほか、「興福寺本日本霊異記上巻仮名字体表」や写真版と複製本の相違点を示した対照表が付されるなど、興福寺本を考える上で重要な内容となっている。

以上、本書の概要について紹介した。意を尽くさない紹介となったことを、監修者・編者および担当各位にご寛恕をお願いする次第である。しかしながら、本書が日本最古の仏教説話集『日本霊異記』を歴史学的手法で読み解いた初めて注釈書であること、丁寧な校異、注釈とともに、最新の研究成果を十分に盛り込み、地図や新刻の説話等の関連史料を網羅していることなど、今後、『日本霊異記』研究において必読の注釈書であることはご理解いただけたのではないかと思う。是非とも読書各位におすすめる次第である。

オリオン・クラウタウ編

『戦後歴史学と日本仏教』

一、本書の趣旨と構成

編者であるオリオン・クラウタウは、その「序文」で、本書の趣旨を以下のように述べている。

（敗戦後―筆者注）思想界全体が変遷するなかで、「日本仏教」の学術的言説がいかに展開していったのかを考えることが本書の趣旨である。かかる目的を成し遂げるべく、本書では、マルクス主義歴史学の「勝利」としての敗戦から始まり、一九六〇年代のアカデミズム批判を経て、公式主義的な歴史学への反省がもたらされた一九七〇年代まで、「日本仏教」の研究をリードしてきた十五名の営みが戦後日本思想史の文脈で回顧されている。今日における「日本仏教」理解の基礎的な部分のほとんどが、彼らによって形作られたことは

（法蔵館、A5判、上冊四二四頁、二〇一五三刊、八〇〇〇円＋税）
中冊五二八頁、二〇一八三刊、一〇〇〇〇円＋税

（大谷大学文学部教授 みやざき けんじ）

福 島 栄 寿

論を俟たない。しかしながら、それらが「常識」となっているがゆえに、この三〇年余の時期における学知の構造については、等閑視されてきたこともまた事実である。この「常識」を疑うことは、いわゆる言語論的転回以後の世界において、「日本仏教」の叙述を構想するうえでも必要な作業であろう。ここでは、これら十五人の「先人」たちを、「戦後歴史学」という言葉をもって総称している。…本書はこうして「戦後歴史学」を広く捉え、多角的な側面から「日本仏教」にまつわる「過去」の再構築に取り組んだようなキーパーソンに焦点を当てる。（九―一〇頁）

少し長い引用となったが、本書の趣旨は、この編者の言葉から理解できよう。そして編者の見立ては、明解である。敗戦後三〇年間における戦後歴史学界において、その学知に

よって構築されてきた「日本仏教」像とは、歴史研究者という主体の問題意識と深く関係しながら描き出されてきたという。したがって、編者によれば、そうした戦後歴史学を担った「先人」たちの業績とは、その研究者の生まれや育ちを含めた人となりはもちろん、研究者になるまでの歩み、学者としての経歴、学界での立場、戦中・戦後という同時代を生きた抜いた体験等を丸ごと含めた一人の研究者の歴史叙述として形成されたものである。つまり、あくまで歴史的存在としての「戦後歴史学」による構築物^{II}学知としての「日本仏教」ゆえに、「先人」たちによって、その「日本仏教」像が如何に描き出されてきたのかを、いわば脱構築する試みこそが、本書の目指すところと言えよう。

目次欄には、編者による「序文」に続き、本書で取り上げられる「敗戦直後より一九七〇年代まで、様々な立場から『日本仏教』の歴史像の再構築に貢献した十五名」（一五頁）の錚々たる「戦後歴史学」者たちの名前が並ぶ。そして、その章立てを兼ねたそれぞれの研究者名には、各々の研究内容や人となり凝縮した象徴的なサブタイトルが記されていて、大変興味深い。各研究者（章）の分担執筆者を合わせて、煩を厭わず、列挙したい。

序文―戦後歴史学と日本仏教・・・オリオン・クラウタウ

者が対峙し、その結果述べられた執筆者の「先人」たちへの見立ての妥当性を、一つひとつ論評できる程の学識は、残念ながら筆者にはない。あくまで、本書の編者であるクラウタウの企画の視点から、本書を紹介したい。

さて、こうした十五名もの名だたる「先人」たちの研究を、言ってみれば、「日本仏教」の構築者たちとして、大胆に一括りに分析して、脱構築しようとする企画を思いつくこと自体、編者の持ち味であろう。ブラジル生まれの編者は、留学先の東北大学での博士論文が元となっている著書『近代日本思想としての仏教史学』（法蔵館、二〇一二年）の「前書き」に、日本宗教史を研究するにつれ、「日本仏教」という物語「自体」に疑問を深めたと記している（一四頁）。そして、「中世仏教」や「近世仏教」も、

結局、そういった筋書きの成立を説明する鍵は中世や近世そのものではなく、それぞれが「時代」として認識されるようになった「近代」の独特な枠組みのなかに求められるべきであろう。この認識の下で、筆者は仏教（史）学の形成期とその担い手の思想的な営為を研究対象として扱うようになった。（一四頁）

と。こうしてクラウタウは、「近世仏教の衰微」という言説の形成・定着・展開・廃棄の流れを、近世後期から明治期、

家永三郎―戦後仏教史学の出発点としての否定の論理
服部之総―「生得の因縁」と戦後親鸞論の出発点
・・・ 末本文美士

井上光貞―焼け跡闇市世代の歴史学・・・ 平 雅行
圭室諦成―社会経済史の日本宗教研究・・・ 林 淳
古田紹欽―大拙に近侍した禅学者・・・ 大澤広嗣
中村 元―東方人文主義の日本思想史・・・ 西村 玲
笠原一男―戦後歴史学と総合的宗教史叙述のはざま
・・・ 菊地大樹
森 龍吉―仏教近代化論と真宗思想史研究・・・ 岩田真美
柏原祐泉―自律的信仰の系譜をたどって・・・ 引野亨輔
五来 重―仏教民俗学と庶民信仰の探究・・・ 碧海寿広
吉田久一―近代仏教史研究の開拓と方法・・・ 繁田真爾
石田瑞磨―日本仏教研究における戒律への視角
・・・ 前川健一

二葉憲香―仏教の立場に立つ歴史学・・・ 近藤俊太郎
田村芳朗―思想史学と本覚思想研究・・・ 花野充道
黒田俊雄―マルクス主義史学におけるカミの発見
・・・ 佐藤弘夫

ただ申し添えておくが、「先人」たちの研究業績に各執筆

さらに戦後日本の学界にまで辿り、明解に描いて見せた。編者のこうした学知としての「日本仏教」への関心を、さらに敗戦後の戦後歴史学の展開において考察し、言説としての「日本仏教」がいかに構築されたのかを説明しようすることが、本書が目指したところと言えるであろう。つまり、錚々たる「戦後歴史学」者たちの業績を脱構築しようとする着想は、そうした「先人」たちの存在を一つの纏まりとして考察対象として把握し、客観化できる距離感と眼差しを持ってなければ、生まれなかったのではないだろうか。

二、内容の紹介

この着想に基づき、さらに、錚々たる十五人の「先人」たちの研究を、いかなる研究者が執筆を担当すべきか、その当りの目配りもとてもよく出来ていると思わせられた。

「序文」には、各章の「論稿」の内容が詳細に紹介されていて、この部分を読むだけでも、各章の研究者の概略を把握することができて便利である。また、各章の扉には、取り上げられた研究者の紹介や執筆の視点が、各執筆者により一五〇字程で上手く纏められている。例えば、その幾つかを紹介してみよう。服部之総（桐原）については、

戦前の日本資本主義論争における講座派の中心人物と

して知られる服部之総は、宗教を「民衆の阿片」と断ずるような自他共に認めるマルキストであった。しかし戦後の彼は、親鸞・蓮如論や真宗改革論を次々と著していく。それはかつての論争敵手であった三木清と真宗寺院の長子という彼自身の出自に導かれたものであった。(四九頁)

と、明解である。また池田英俊、吉田久一と合わせて、近代仏教史研究を牽引してきたいわゆる「ビッグ3」の一人である柏原祐泉(引野)については、

近代仏教史の先駆的研究者として知られる柏原祐泉は、同時に近世の排仏論・護法論、中世の親鸞思想など、多端な素材に挑み続けた人物でもあった。本稿では、「宗教の自律性」や「仏教の本来性」など、柏原が多用したいくつかのキーワードに着目し、精力的な彼の仕事を支えた問題意識の根幹に迫った。(二〇五頁)

との、執筆を担当した引野の言葉には、柏原に対峙する気構えが感じられよう。そして、その顕密体制論で知られる黒田俊雄(佐藤)についての、

戦後歴史学をリードしたマルクス主義史学では、宗教は上部構造に位置づけられるものであり、自立した存在基盤をもたない虚偽意識にほかならなかった。しかし、黒

田俊雄の親鸞に対する強い思い入れは、そうした基本構造そのものの変容をもたらし、それが黒田の学問に、独自の色合いと魅力を付与する源になった。(三三三頁)

という佐藤の言葉は、学問がその人となりと不可分であることを物語っている。

この扉の紹介文を幾つかを拾い読みをするだけでも、本書に取り上げられた「先人」の研究者たちが、学界に残した足跡の大きさを実感することができる。生涯をかけての研究業績が、学界共有の知的財産として影響をもたらし、そして後進の研究者たちによって研究史に照らし評価されること自体、並大抵のことではないことを、今更ながら痛く感じさせられるのである。

むろん、各執筆者においても、「先人」たちとの対峙は並大抵のことではなかったことが随所に感じられる。古代中世仏教史研究者の井上光貞を担当した平雅行は、井上について、「その研究には敗北の時代を、矜持をもって生き抜いていた。井上光貞の研究と魅力と陥穽がここにある。」(七七頁)と扉に記し、「おわりに」を、次のような結語で終えている。

私は、敗戦後という時代の空気が、井上光貞の浄土教

研究にある種のゆがみを生じさせた、と述べてきた。しかし、人に投げつけた言葉は、そのまま自分に返ってくる。私の研究に、どのような時代の影が刻印されているのか、私もまたいつか、厳しく批判される日がやってくるのであろう。(九六頁)

こうした平の率直な言葉を読むと、筆者には今更ながら、かのE・H・カーが「歴史とは何か」について述べた、「歴史とは歴史家と事実との間の相互関係の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きぬことを知らぬ対話なのでありませぬ。」(『歴史とは何か』岩波新書、四〇頁)との、有名な一文が思い出されるのである。現在を生きる歴史研究者たちが、過去と向き合い歴史を叙述してきたその蓄積が、歴史像を形成してきたと理解すれば、言語論的転回以降においては、歴史研究者によって描かれてきた歴史像もまた、一つの構築された歴史的言説として歴史化される運命にあるということになる。そして、その歴史研究者たちは、絶対的な眼差しを持ち合わせているわけではなく、歴史の一コマとして相対化されていく存在なのだ。編者が、本書の見返しの裏にヴァルター・ベンヤミンの『歴史の概念について』(IX)から、(歴史の天使とは―筆者注)過去に顔を向けており、我々には出来事の連鎖が見えるところに、彼はただ、破局の

みを見る。その破局は、絶え間なく廃墟の上に廃墟を積み重ねて、彼の足元に投げつけてくる。

この言葉を引用しているが、ベンヤミンのこの言葉は、「天使」ではない人間が、その眼差しによって歴史を描いて構築していく営みの限界を痛烈に指摘しているのだらう。

かくも歴史研究者とは、自らの可能性と同時に限界を自覚しつつも、それでもなお、果敢に過去に向き合おうとする存在なのかもしれない。

吉田久一を担当した繁田は、吉田の研究成果を評して、もし私たちが吉田の研究のわかりやすい部分だけを切り取って、あとの複雑な部分は顧みないという態度に終始するならば、近代仏教史を切り拓いていった吉田の初志を私たちは十分に汲むことはできないだろうし、それこそ、形式的な継承以上に進むことはできないだろう。

若き日の経験と、具体的な実践のなかで培われた感受性をもって、内面と社会、そして知と現実を結びつけようとする二元論を生きた吉田久一。しかしその成果である近代仏教史研究から、どのような可能性を汲みとるかは、私たち後進に問われている課題なのであろう。

と述べている。吉田の研究を客観化し、跡付けることを通して、執筆者の繁田自身が吉田の残した課題を引き受けようとしている。本書の企画に執筆者として参加した若手研究者にとっては、こうした「先人」たちとの対峙を通じて、それぞれが自身の課題と出会い直す機会ともなったようである。

三、おわりに

本書の最後に掲載された佐藤弘夫による黒田俊雄論は、黒田学説の中核をなした顕門体制論や顕密体制論についての明快な解説としても読め、大変参考になる。また、黒田と双極をなした網野善彦との比較論も、また然りである。

本書の書名は『戦後歴史学と日本仏教』であるが、各章において紹介される「先人」たちが遺した研究の足跡を読むにつけ、その「日本仏教」像は、多様な描かれ方をしてきたということが改めて気づかされる。仏教史研究者のみならず、多くの歴史研究者にも本書をお薦めするゆえんである。

ベンヤミンの言葉を噛み締めつつも、しかし、まだまだ、私たちは、この歴史探訪の旅を止められそうにない。なお末筆ながら、紙幅の都合上、網羅的に本書の内容を紹介することが出来なかったことをお詫びする。

注 拙著「書評 オリオン・クラウタウ著『近代日本思想としての仏教史学』」（『日本思想史学』第四五号、二〇一三年）を参照されたい。

（二〇一六年一月刊、A5判、三八一頁、

三八〇〇円＋税、法蔵館）

（大谷大学文学部歴史学科 ふくしま えいじゆ）

第一編 緒言 一、本書の目的と意義 二、本書の構成と特色 三、本書の参考文献

第二編 黒田俊雄の歴史学 一、黒田俊雄の歴史学 二、黒田俊雄の歴史学 三、黒田俊雄の歴史学

第三編 網野善彦の歴史学 一、網野善彦の歴史学 二、網野善彦の歴史学 三、網野善彦の歴史学

第四編 戦後歴史学と日本仏教 一、戦後歴史学と日本仏教 二、戦後歴史学と日本仏教 三、戦後歴史学と日本仏教

第五編 結論 一、結論 二、結論 三、結論

第一章 緒言 一、本書の目的と意義 二、本書の構成と特色 三、本書の参考文献

第二章 黒田俊雄の歴史学 一、黒田俊雄の歴史学 二、黒田俊雄の歴史学 三、黒田俊雄の歴史学

第三章 網野善彦の歴史学 一、網野善彦の歴史学 二、網野善彦の歴史学 三、網野善彦の歴史学

第四章 戦後歴史学と日本仏教 一、戦後歴史学と日本仏教 二、戦後歴史学と日本仏教 三、戦後歴史学と日本仏教

第五章 結論 一、結論 二、結論 三、結論